

切断機

越川鋼業物産は、大手飲料水貯蔵タンク製造業者と提携し、飲料水タンクの架台を製造している会社です。  
昭和四十四年に建築関係資材の製造を中心として創業しましたが、十年ほど前からこの架台の製造に移行しました。現在、大・小さまざまな架台約三〇〇

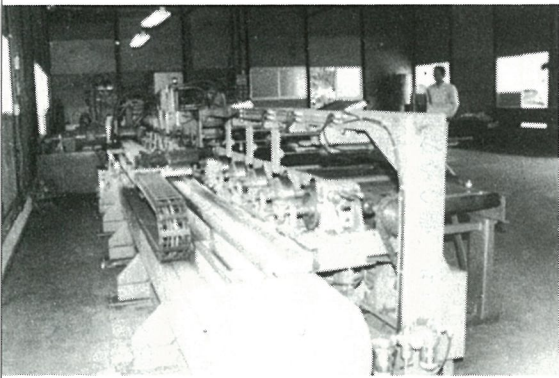
# 町内の会社 紹介します

有限会社 越川鋼業物産  
所在地 二又  
代表取締役 越川幸雄氏

## 飲料水貯蔵タンクの 架台を製造

種を製造しており、県内では同種の製造会社は無いだろうという事です。

材料のほとんどは鉄で、近隣の鋼材店から「(アングル)へ(チャンネル)と呼ばれる長さ十二メートルの鋼材や鋼板などを仕入れ、提携企業からの注文に応じた加工をし、納品していきます。この製品は、規格の正確さを要するため、特に穿孔には注意がはらわれてきましたが、手動による機械操作はむずかしく時間のかかる作業でした。このため昨年はC・N・Cマシン(コンピュータ制御の穿孔機)を導入しました。この機械は、三面の穴を同時にあけることができるため、正確さはもちろん、作業能率も上がり、従来を上回る注文にも対応できるようになりました。



CNC マシン

## 野長

### ひとりごと

#### 里の秋

「里の秋」という童謡がある。戦後作られたこの童謡は、多くの日本人に愛唱され、人々の心に郷愁を呼びおこした名曲である。詩もまた素晴らしい。私は秋が来るたびに、きまって一度や二度この歌が口を衝いて出てきて、夢中でうたった子供の頃を懐しく思い出すのである。年毎にまちの佇みや人の姿、形は変わっても、四季の移ろいには寸分の狂いもなく、今年もまた昨年と同じ秋が野山や町並に静かに訪れてきた。何かしら空で、物悲しい秋の気配に、心が沈む頃でもある。そんな折、去る九月二十一日付けの朝日新聞に、「忘れなかつた子供の心」と題する記事が掲載され心に残った。多少長くなるが記事の一部を引用してみよう。

二十日未明亡くなった作詞家 斉藤信夫さん(七六) 成東町五木田 〓は、代表作「里の秋」などの童謡作家として知られ、

## 斉藤 譲

同町出身の伊藤左千夫を継ぐ「郷土の文化人」として地元の人に親まれてきた。地元では「子供の心を本当によく知っていた」学校の先生としても人望があった。へ静かな静かな里の秋…… 斉藤さんは、その秋に、帰らぬ旅にたつた。斉藤さんは昭和六年千葉師範卒業後、千葉市内の小学校に勤務、翌七年から童謡の詩作をはじめた。終戦直後の二十年十二月、復員第一号船を迎える歌として、作曲家の海沼実さんと作った「里の秋」が大ヒット。これまでに作った童謡の詩は一万一千作を超えており、その三分の一に曲がついている。代表作としては、「里の秋」のほか「蛙の笛」「夢のお馬車」などが有名である。更に、同級生など二人の先生が、斉藤さんの人柄について次のように語っている。「斉藤さんは、教職に就かれたときは子供一筋で、校長などの職を嫌い、常に子供と一緒にいることを望まれた。また一方では、子供心を友として、

死の間際まで童謡の詩作にとり組む情熱家でもあった。」

以上が記事のあらましである。私達の心に、ふるさと心と甘い夢を育ててくれた偉大な作詩家は、小学校の先生であったのである。斉藤さんの代表作である「里の秋」「蛙の笛」「夢のお馬車」は知らぬ者がないほど有名であり、不滅の名曲としてこれからも永く人々に歌い継がれていくことであろう。それにしても、日本を代表するこれらの童謡が、私達と同じ房総の一隅、成東町で生まれていったことを知る者は少ないのではあるまいか。斉藤さんは、役職を嫌い、子供のよう清い心で、子供と一緒に生きる中からあのように人の心を打つ澄んだ詩を作り出していたのである。

過ぎし夏の日の疲が、いま私達の体や心にどつとのしかかっ てきている。今こそ、清冽な秋の風に身をまかせ、疲れた体を癒し、拗れた感情の糸をゆつくりとときほぐし、その中から「子供心の糸」を探ってみよう。やがて、清らかな歌声が、快く聞えてくるはずである。へ静かな静かな里の秋 お背戸に木の実の落る夜は ……